

そこらへんの草も食べた埼玉県人の雑草図鑑の先達、
坂庭清一郎先生

森田 弘彦

東京都内で名門と評判の高い白鵬堂学院で、東京都民の生徒会長（東）と埼玉県民の学生たち（埼）との間で以下のやりとりがあったそうな。

（埼）この子が急に腹痛を起こしたので医務室へ

（東）医務室を利用できるのは東京都民だけだ
出ていけ！

（埼）ひどく苦しんでるんです！ お医者様に見せるだけでも……！

（東）そこらへんの草でも食わせておけ！ 埼玉県民ならそれで治る！

（埼）あたしたちは牛じゃない！

（魔夜峰央『翔んで埼玉』2015）

雑草を含む「そこらへんの草」ではたぶん牛の病気は治らないし、飼うこともできないので、この学院では飼料作物学や畜産学に類する課目がないのであろう。原作のコミック本にとどまらず、実写版の映画も好評とのことであるが、作者によると、ここでの東京都も埼玉県も架空の地だそうな。実在の埼玉県と「そこらへんの草（雑草）」となると、少しさかのぼった時代に埼玉県に生まれて没した、雑草や食用野生植物の先達としての坂庭（阪庭）清一郎先生を思い浮かべた。

坂庭氏の「雑草（松榮堂）1907（図-1A）」は半澤洵先生の名著「雑草学 1910」より3年早く出版され、「身近な自然を掲載する理科の教科書の普及を背景に明治40（1907）年頃に出版された多くの植物図鑑」の中で、特定分野のものひとつに挙げられた（俵 浩三「牧野植物図鑑の謎」1999）。坂庭氏は、萱場柔壽郎氏との共著である「野外植物（尚友館）1905（図-2A）」をもとに、「学校の園の管理者、并に小學校の農業科受持者の、機に臨み、折に觸



図-3 坂庭氏の著作「野外植物」、「雑草」および「雑草の研究」における6種の水田雑草挿図の比較（筆者蔵本より）

れ、児童を指導して、除草せしむるに際し、雑草の名称、特性、除草の必要、并にその方法等を説明するは、甚だ有益にして、且興味あることなるべし。（凡例）」との意図で「雑草」を著し、その6年後には、雑草の区分を「生育環境」から「科」に変更して「雑草の利用一覧」などを加えた「雑草の研究（松榮堂）1913（図-1B）」を出版した。「野外植物」は3年後に萱場氏との共著で「新編植物圖説 1908（図-2B）」として本文1,240頁（増訂版 1911）の大部となったが、「雑草」から「雑草の研究」で、本文は149頁から205頁への小幅増であった。「野外植物」、「雑草」および「雑草の研究」での挿図を6種類の水田の雑草でみると（図-3）、後の2編では「野外植物」の図より粗雑さが目立つので、坂庭氏が単独での著作用に萱場氏との共著での図を描き直して使う必要があったように思われる。

坂庭氏の経歴は、第二次大戦で国内の戦時体制が厳しくなる中で出版された「食用野生植物 1942（図-4）」の巻末に、当時の埼玉縣蚕業試験場の岡部康之氏が寄せた「跋」と、上記の「雑草」を収録した「明治農書全集 第12巻 病虫害雑草農業 1984」で、昆虫学者で植物防疫の歴史に関する多数の著作で知られる小西正泰氏の執筆になる「解題」に詳しい。以下はその概略である（埼玉県内の地名は旧表記のまま）。なお、小西氏の「解

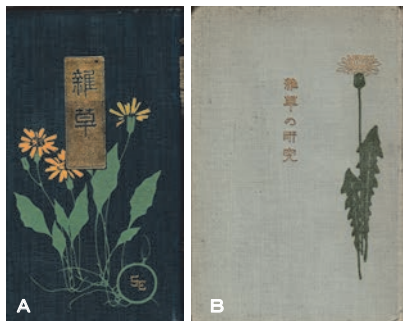


図-1 坂庭清一郎氏の著作：「雑草 1907（A）」と「雑草の研究 1913（B）」の表紙



図-2 坂庭氏と萱場柔壽郎氏の共著：「野外植物 1905（A）」の表紙と「新編植物圖説 1911（B：増訂版）」の扉



図-4 坂庭氏の著作「食用野生植物 1942」の表紙(A)と、写真と和歌「櫻仙 深山路におふるはるくさ 採りわきて あぢはふはかり 楽しきはなし」を載せた扉(B)

表-1 「食用野生植物」の情報源と見られる「雑草利用一覧」所収の植物

食用(飲料)	薬用	觀賞用
アカザ, アマチャヅル, イヌガラシ, イヌビユ, オニタビラコ, オホバコ, カウゾリナ, カワホネ, カハラケツメイ, クログワキ, コアカザ, スギナ, スミレ, スベリヒユ, セリ, ツククサ, ツルボ, ドクダミ, ナヅナ, ノビル, ハコベ, ハハキギ, ハハコグサ, ホソバタデ, ホンタデ, ミミナグサ, ヤナギタデ, ヨモギ, ヨメナ, 井ノコツチ	アカザ, イヌナヅナ, イヌホホツキ, ウマノスズクサ, オホバコ, カワホネ, ガガイモ, カキドボシ, カダバミ, カラスビシャク, ギシギシ, クサノワウ, クマツヅラ, クログワ井, セリ, タウゴギ, タケニグサ, タネツケバナ, チドメグサ, ツククサ, ツルドクダミ, ドクダミ, ナギナ タコウジユ, ナヅナ, ニハヤナギ, ノビル, ハコベ, ハハキギ, ハマスゲ, ハンゲシヤウ, ヒルガホ, ヒルムシロ, ヘビイチゴ, マメタヲシ, ミツタガラシ, ミツガシハ, メナモミ, メハジキ, ヨモギ, ルータサウ, 井, 井ノコツチ, ヲグルマ, ヲナモミ	アムシキヤ, カワホネ, キンギヨモ, クサネム, コケオトギリ, コナギ, コヒルガホ, ササナギ, サギゴケ, スミレ, センナリホボヅキ, タチツボスミレ, ナンパンギセル, ハダカホボヅキ, ヒツジクサ, ヒルガホ, マツバ井, ミゾホボヅキ, ヲグルマ
		理科実験用
		アヨミドロ, キツネノマゴ, タヌキモ, チャウチンゴケ
		その他
		アカネ, イヌムラサキ, イラクサ, スベリヒユ, ツククサ, ニハヤナギ, ノアヅキ, ハハキギ, レンゲサウ

「雑草の利用一覧(雑草の研究 1913)」の記載種を筆者が利用区分ごとに整理, 和名表記は原文のまま。

題」は、江戸時代から坂庭氏の活躍した時代を通しての、雑草防除の優れた技術研究史になっている。

1864 (元治元年): 埼玉県児玉郡丹庄村で出生

1892 ~ 1898: 埼玉県・茨城県・栃木県で教職

1900 ~ 1915: 宮城県師範学校, 宮城県女子師範学校で教鞭, 退官後には、埼玉県児玉郡児玉町に住んで植物書などを執筆

1945: 4月に埼玉県大里郡三尻村で逝去, 享年 80 歳

上記の「食用野生植物」は、「第二次世界大戦で雑草や野生植物に頼って飢えをしのぐ事態に陥った」中での出版物のひとつ(雑草のよもやま 8 2017)である。坂庭氏は本書の「緒言」に掲載した情報の源を以下のように記した。

明治 43 (1910) 年東北地方凶作の時に仙臺に在りて食用野生植物の調査に従ひ、續いて山の旅行中に宿とした炭焼小屋, 旅行者の其の夜を明かす一夜泊りの小屋等にて食したる植物と、其の他諸方の山野等に在る草木の新芽, 根等につきて實驗したるものなり。

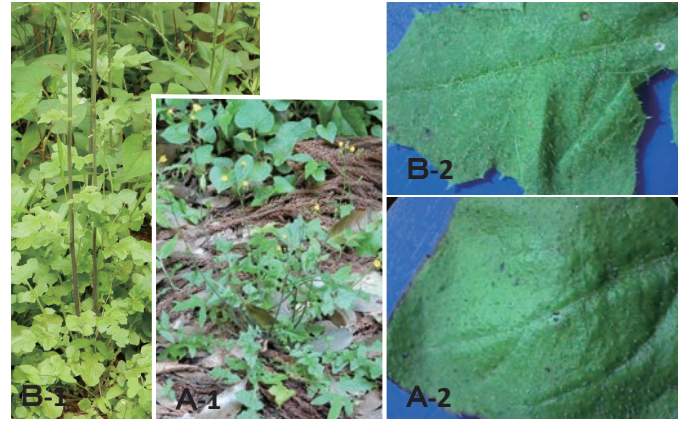


図-5 亜種に区分されたオニタビラコ: アオオニタビラコ(A:千葉県柏市)とアカオニタビラコ(B:茨城県牛久市)の全形(1)と根生葉の表面(2)

東北地方での体験が情報源と見られる「雑草の研究」所収の「雑草の利用一覧」では、「薬用」の植物が最多であったが(表-1)、「利用厚生」が求められる時代にあつて「食用野生植物」に情報を集中したのであろう。

ところで、樹園地や市街地に普通のキク科植物オニタビラコは近年、アオオニタビラコ (*Youngia japonica* (L.) DC. subsp. *japonica*) とアカオニタビラコ (*Y. japonica* subsp. *elstonii* (Hochr.) Babcock et Stebb.), およびその雑種などいくつかの分類群に分けて記載されるようになった(米倉・梶田 2003 YList, <http://ylist.info> 2019年4月6日アクセス確認)。「植調雑草大鑑 浅井元朗 2015」もこの分類を採用したことから、除草剤の適用性試験の成績書にも「アオオニ, アカオニ」の雑草名が使われるようになった。「アオオニ: 多年生, 花茎複数・茎葉少~無, 根生葉濃緑色 アカオニ: 一年生, 花茎少数・茎葉複数, 根生葉柔軟赤味」とされるが中間型もあるようで、両者の識別はなかなか難しい(図-5)。ところが、坂庭氏はオニタビラコの食味の違いに気づいて、前記の「緒言」の末尾に次のように書いた。

同品種のものにても生ずる處の異なるに因りて香味の異なるものはセリ(芹)に於て明かなり。・・・オニタビラコにありては、赤褐色の葉のものは味は佳なるも緑色葉のものと黒斑ある葉のものは味ひ遙かに劣るが如し。

オニタビラコの亜種との対応を確認できないが、「オニタビラコ内の違い」を舌の感覚で予見された坂庭氏のこの体験は、東北地方ではなく、埼玉県に帰住されてからのように思われる。さすがに、雑草研究の先達の埼玉県人は、漠然と草を食べていたのではなかったのだ。